

第32回 四国国語教育研究大会（徳島大会）

新しい時代に必要となる言語能力の育成～つながりを意識した授業展開の工夫～

善通寺市立東中学校 岡本 浩子

丸亀市立南中学校 山田真由子

1 全体会（秋田大学名誉教授/東京未来大学特任教授 阿部 昇 氏 講演）

① 概要

現代の学習指導要領では、「言語能力」が教育の中心的な柱として位置づけられている。国語科だけでなく、全ての教科で「言葉による思考・表現・理解」が求められている。しかし、これまでの国語教育では「言語能力」を十分に、意図的に育ててこなかったのではないかという反省がある。これからは「言葉をどう使って考えるか」「根拠をもって説明・評価する力」を重視すべきである。

② 考察

言語能力は、国語だけでなく全ての学習の基盤である。国語科はその中心として、子どもが自ら「言葉で考え、表現し、批判する力」を育てる授業を作るべきである。文学的文章の読みを通して、豊かな思考力・感受性・表現力を育むことが求められている。文学の授業を、言葉を手掛かりに思考を深める学習の場として位置付けることが重要であると考えた。

2 授業【読む】

① 概要

単元名：『言葉』をもつ鳥、シジュウカラ』を読んで、文章の良さを捉えよう。

～二つの文章を比較して読むことを通して～

授業の流れ：同一著者の同一体験を、仮説検証型で書かれた説明的文章（教科書）とエッセイ（単行本）に書き分けているものを比較して読むことで、それぞれの特徴を捉える。説得力のある文章にするために必要な工夫を学び、自分たちが今後書いていくレポートの書き方に生かす。

② 考察

同じ体験を書き分けていることに注目し、「なぜ書き分けたのか。」「目的は何か。」「それぞれの工夫は。」等、比較することで明らかになるそれぞれの特徴を、ICTを用いた意見交換を通して学んでいた。ほぼ全てのワークシートをタブレット上で行うことで学びの積み上げができ、既習の文章で学習したこと（『ダイコンは大きな根？』）を振り返って今回の学習にも生かすことができていた。また、意見交換が即時に行えることも大きなメリットである。ただし、紙との共存については討議会でも議論となっていた。

授業の途中、生徒から「順番どおりに書くと分かりやすいから。」という発言があったが、授業者はそのたびに「なぜ分かりやすいの？」「何が分かりやすくなるの？」と、より具体的な発言を促す声掛けがあり、参考になった。振り返りについては、「R80（アールエイター）」という手法を用いており、その時間に学んだことを80字でまとめていたので、今後、導入を検討したい。

3 分科会Ⅰ 学びのつながりを意識した「読むこと」の学習

～『ダイコンは大きな根？』の読みを野菜説明文の作成に生かす～

① 概要

授業前に「小学校の説明的文章でどのようなことを学んだか」についてアンケートを取り、生徒のこれまでの学びを把握しておく。そのうえで、生徒たちに「内容の面白さ」ではなく、「説明の工夫」について学

ぶことを初めに示しておく。また、学んだことを生かして、自分たちも「野菜の説明文を書く」ことも示し、「読むこと」で見つけた工夫を「書くこと」へつなげる意識を持たせる。

② 考察

過去にどんなことを学んだかを、教師も子ども自身も把握したうえで積み上げていくことが大切だと改めて感じた。この授業で何を学んだかを振り返らせるときに、「工夫を見つけられた」ではなく、どんな工夫を見つけたのかについて書くことを助言することで、振り返りの質が向上することを学んだ。成果物(作品)で評価をすると、「読み」ではなく「書く」の評価になるのではないかと、という指摘があったが、指導者の方によると、筆者の工夫を見つけ、それを生かして書けたら読んでいると捉えてよいのでは、とのことであった。

4 今後に向けて (R9 四国大会)

現在、丸亀地区では、「石垣カード」と「足場かけ」を用いて研究を進めている。「石垣」は、学びの比喻(メタファー)として、子どもがこれまでに身に付けた力をどのように次の学びへとつなげていくかを可視化するものである。また、その石垣をより確かなものにしていくための工夫や支援を「足場かけ」と呼んでいる。

子どもたちは「石垣」によって可視化された力を、学習の見通しとして用いることで、自分が身に付けるべき力を自覚することができる。また、適切な「足場かけ」があることで、安心して学習に向かうことができる。そして、学習の終わりに、再び「石垣」を用いて振り返りを行うことにより、自らの学びの積み上げを実感し、達成感をもって次の学びへ向かえるのではないだろうか。次期学習指導要領が現行の方向性を維持しつつも、大幅な変更を伴う見通しであることから、変化に対応可能な「学びの積み上げ方」の提示を目指したい。